工芸の意味とその変遷 No. 1

デザイン学科・工業デザイン研究室
飯　岡　正　麻

Meaning of KOUGEI and Its Transition No. 1

by Masao IIOKA

1) はじめに

明治以後，工芸という言葉に与えられた意味は，一定したものではなかった。そして今日においても，歴史的な流れの中で，幾つかの意味をもって使われる。この言葉に与えられたその意味の歴史的経過をたどることによって，いま現在，この言葉が意味するものを明確にしておくことは，デザイン教育に携わる者として，無用の混乱を避けるためにも必要と思われる。

本稿においては，いろんな所で使われた工芸と言う言葉（場合によってはそれに近い言葉）と事実を拾い上げ，編年的に列記することによって，その工芸と言う言葉の使い方の変遷をたどり，その意味の解釈は最小限にとどめる事にした。

2) 工芸が産業，工業を意味する時代

1866年　慶応2年

福沢諭吉は「西洋事情」を出版した。その中で，博物館を述べている所に，次のような表現がある。

前条の如く，各国に博物館を設けて，古来世界中の物品を集と雖ども，諸邦の技芸工作，日に開け，諸般の発明，随て出，随て新なり。

ここで述べられた技芸工作は，今日の言葉で言えば，技術，工業に近い内容を表しており，その後，これと同様な意味を表す言葉として工芸という言葉が使われる様になる。

1867年　明治3年

大島高任の「坑学寮新設に関する意見書」

高任曽て聞けり，昔者徳川氏家康以来三世の間，佐渡坑山の産歳毎百万金に下らずと。蓋し西洋の学術皇国に伝えてより以来，文物開化し百事進歩して工芸其精を極めざるなし。独り坑山の事未だ器械を用いて大益を起こす法を知らず，遺憾に堪えず。

明治維新以来，種々の近代的な技術が導入されたのに，鉱山の技術だけがそうではないことを遺憾としているのである。この場合の工芸は，技術と考えてよい。

1872年　明治5年

「ウィーン博に関する太政官布告」において，学術工芸という言葉が使われる。

天産物，人造品を出品し，学術工芸の進歩，政治経済の要旨を表現し，人類の交流により，利用厚生の道を十分に尽すものとす。

学術工芸とは，今日で言えば，学問と技術，あるいは学術と工業にあたろう。

1875年　明治8年

1873年のウィーン博に日本は公式参加をする。

その公式報告書が，「ウィーン博参同紀要」として刊行される。その序文において，佐野常民は次の様に書く。

古人言うあり百聞は一見に如かずと，人智を開き工芸を進ましむるの最捷径最易方は比眼目の教えに在るのみ。

ここでの工芸は，間違いなく産業・工業である。

1878年　明治11年

「工芸志料」が博物局より出版される。黒川真頼が書いたその序文。

工芸を勧め励まして国の用に利し，貨財を殖すは，国を治める者の宜しく尤も急とすべき所なり。而して博覧会は人の知識を開き，工芸を盛んにする所以の事なり。欧州各国の称して文明となすは，蓋しこの道に因りて弘む。富国強兵の計は実にここに基づき，其の事の鄭重なる，以て知るべし。

富国強兵は工芸の発展によると言うものであるから，間違いなく工業の事である。ただし，工業の意味するものは，国の発展段階で異なる。明治初期においては，現代的意味の工業は未熟であり，手工業と明確に分離されていないことに注意しておく必要がある。

この本の内容には，建築，架橋，造船等もふくまれる。手工的生産も機械的生産も工芸として論じられている。

1879年　明治12年

明治4年，岩倉具視を全権大使とする使節団が，条約改正などを目的に，1年10カ月にわたる欧米回覧の旅に出る。このことを公式に記録する「特命全権大使欧米回覧実記」が久米国武によって刊行される。その中のアメリカの大統領グラントの演説の一部。

他邦との交際貿易を増進し，製作工芸の進歩に勉励を加え，四海の各地と往来音信を便易にし，他邦の遷民を優待してその風俗技芸を国内に誘導し……

ここでの製作工芸が，英語でどの様に表現されたのかさだかでないが，今日の産業・製造技術に近い。ちなみに，製作工芸は文明的であり，風俗技芸は文化的側面を指しているようである。

同書の中でウィーン博の出品物について

欧州の工芸に秀でたるは，元来その器械の利なるによる。利器を製するは，鉄冶の業を盛大にするにあり。

とのべる。欧州の工芸が優れているのは，製鉄が盛んであり，それによって精密な機械を作れるからであると言うことである。工芸はやはり工業である。

1880年　明治13年

京都に「美術工芸学校」が創設される，

1881年　明治14年

東京職工学校が創立される。職工学校には化学工芸科が設置された。下記はその学則の一部である。

将来職工学校の師範若しくは職工長製造所長たるべきものを養成するの目的を以て，之に必須なる諸般の工芸等を教授する所とす。

ここでの工芸は，技術と考えるのが妥当である。工芸とは実用になるものを作ることである，と考えれば，化学的手段を使って合目的物を製造することは，当然ながら化学工芸と言うことになる。

「東洋学芸雑誌」21号で三宅秀は（化学と医学の関係を論ず）と言う文を書く。

そもそも化学は百般工芸の基本にして，能く幾多の原素を離合せしめ以て吾人日用の物品を製造すること，…

ここでは化学をあらゆる工芸の基本とし，それを使って日用の品物を製造することを工芸という言葉で現している。東京職工学校の化学工芸と同じ考えであろう。

1885年　明治18年

東京大学の機械工学，土木工学，採鉱冶金学，応用化学などの諸学科を分割して工芸学部が新設され，造船学科も工芸学部の付属とされた。今日の工学部に当たる。理学と異なり，その応用の学が工芸なのである。

1886年　明治19年

この年書かれた「高橋由一画史料」で由一は工芸と言う言葉をいろんな意味に使っている。

本邦固有の美妙を海外に示し，従てこれを応用すべき工芸上作物の改良を計るの途，殆どまさに絶えなんとす…

ここでの工芸上作物は，産業によって造られるものを意味しているのであろう。

凡絵画の工芸の事は，重々淑女の務めに成れり，

と書いたときの意味は，製作技能・技術の事であり，

さすれば社会は自然これに倣い，日を期して工芸の進歩あらはれ国の富源の開くの基となるべし。

と書いたときの工芸は，産業，工業の意味である。

この手たるや，郊外に散歩し或は花を見る時，山を登り水を渉たる時にも，全て美観を写し取るべきなり。欺く一眼一手を授くる上は之を工芸に施して無上の快楽を受くべし。編物，刺繍，陶画，蒔絵，彫刻，諸道具の下絵等を工夫することは，又尤愉快の事にして，工芸者の模範とも成り，

と言う場合の工芸は，今日の手工芸に近い使い方である。

東京大学を東京帝国大学へ改組するが，その主旨を，

国家の須要に応ずる学術技芸を教授し及び其蘊奥を攻究するを以って目的とする。

としたのである。

3）　美術と工芸と産業の関わり

明治19年に「美術品及び応用美術品の輪出を増進せしむる為め美術局の設立を要するの儀に付き建議」と言う内閣総理大臣　伊藤博文宛の文が提出される。

謹て惟るに美術及び応用美術は経済上重大の関係を有し国家殖産の一大渕源たり…
殊に本邦美術の精妙なるは人民特有の性質にして美術工芸に適当なる実に海外諸邦に冠絶せんと言うべし

次は「文部省に美術局を設けられ度意見」であるが，岡倉天心の筆になるものである。

夫れ美術及応用美術は方今文明開達の需求に緊切なるは論をまたず（中略）我が日本国民の如きは天質能く美術工芸に適し（中略）経済の点より我が国勢を察するに天産物を輸出するよりは寧ろ人

工技術を伸張すべき必要あるを見れば一層美術及び応用美術の奨励に着手すべき（以下略）

1887年　明治20年

前記のような建議の結果として，絵画，彫刻，建築及び図案の師匠を養成するところとして東京美術学校が創立され，22年開校することになる。

美術学校ができると，そこで育った工芸家は，単に産業としての工芸ではあき足らず，芸術的傾向を持つようになる。

納富介次郎は石川県金沢区工業学校を設立する。（24年県立移管）

ワグネルによる「竜池会報告」

日本に於いては彼の絶妙美術と美術工業の関係が甚だ親密である。昔は欧州に有りても親密でありしが理学の驚くべき進歩のために薄くなりたり。しかし今日に至りては全ての政府も人民もこの絶妙美術と美術工業の合併の必要を知り，この目的を達すると務るなり。

今日的解釈によれば，絶妙美術とは純粋美術であり，美術工芸をデザインと考えてよいであろう。

1888年　明治21年

工学会誌の84巻に掲載されたワグネルの「工業の方針」と題する文。

農商務大臣より諸君の前にて日本の工業の有様について余の意見を述ぶべしとの命を被れり。日本の工芸品はあらゆる世界に行き渡り今日本の行く末又は日本工芸の行く末の今より考えるに日本の工業は今より追々西洋との工業の競争激烈なるに至り，日本の工業は日本の工業なりと云うこと是なり。この意味たるや，日本の産物は凡て日本に限る，日本の良き味じを持つと云うの意なり。総て外国の工芸品にはこの類の性質は地を払って消滅せり。
欧州及び米国に於ける各国の工業品は皆な固有の性質を有するものにあらず，如何となれば日本の工芸品は欧州の美術品とは，其異なる所多くして，日本の美術思想は之を欧州に比すれば其趣を異にし，且つ其仕事巧なるを以てなり。

ワグネルは，日本において工業によって造られたものは工芸的であるべきとしている。それは伝統と結び付いた工芸概念，技巧を伴う美を指しているようである。

10月，帝室技芸員の制度が創設される。

技芸員たるものは，帝国博物館総長監督の下に在って，本邦の美術を奨励するため，古を徴し，今をかんがえ，工芸技術を錬磨し，後進を指導する」とある。これによれば，工芸技術が技芸であり，絵画・彫刻も含んでいる。

東京美術学校の官制が改正された。その校則には

第一条　東京美術学校は絵画・彫刻・建築，美術工芸の諸科を教授する所とす。とし，美術工芸科（本科には当分金工，漆工を設く）にはヨーロッパの芸術概念の影響があり，美術工芸，狭義の工芸である。

「説明　東京美術学校」予算請求書は，岡倉天心の秘書　剣持忠四郎が書いた物であるが

工業振作の上に在りては機械美術倶に均しく要用にして社会の利便を開き人力を省くの利器としては機械固より必要なりと言えども我が国民天稟の長所を利用して優雅巧妙の製作を為し世界の名誉利益を併享するを得へきもの蓋美術工芸に於て之を期すへきなりとす…

とあり工業製品と手工芸品の区別がはっきりして来る。

1896年　明治29年

臨時博覧会事務局設置される。パリー博出展のためである。

出品部類　第2部　美術作品　この部は美術作品に限りこれを採取す。装飾品は他の部類中特に其の欄を設けたり。油絵、下絵、絵画、彫刻術及び石版術、彫塑及び章牌又は宝石類の彫刻，建築術

4）産業としての工芸

1897年　明治30年

東京工業学校付設工業教員養成所に工業図案科が設置され，明治32年本科に編入される。初代校長手島精一は次のように述べる。

我工業の発達に伴い，同一多数の物品を製造し，これが販路を広むるの一方便として適当なる意匠図案を施すにあり，図案科の上に冠するに工業の二字を以つてし，主として普通工業品に於ける図案者を養成するの意を明かにせり。

工業学校に図案科を置けば，その図案科がただ絵を描くばかりでなく，物品の用途を明らかにしてやるから甚だ成績がよろしくなるのである。どの工場に行っても，機械はこういう風にして作る，焼物はこうして焼く，織物はこうして織るというので，その知識を応用するのであるが，織物を織る道も知らず，焼物を焼く方法も知らぬものが図案を作るからいけないのである。工業学校の工業図案科はそういう意味で置いたのである。

ここでは工業図案と言う言葉を使い，今日の工業デザインを意味する内容を明確にしている。

1898年　明治31年

納富介次郎は，香川県工芸学校を設立した。

1900年　明治33年

日本政府はパリー博に参加したが，そこでは，美術作品（日本画，西洋画，彫刻，建築）と優等工芸品とが別々に扱われる。工芸が純粋美術より一段低いものであるとする観念を明治の工芸家にうえつけた点で注目すべきである。

1901年　明治34年

東京職工学校は，東京高等工業学校と改称し，「工業図案科」を設置する。

当時の国際情勢の中で，日本が生き抜いて行く為には，日本人の芸術的特技を生かした，製造加工技術を進行する必要があると言う校長，手島精一の考えによるものであった。

1902年　明治35年

「衆議院の建議書」が出される。

実業教育は近年稍稍発達の運に向かひたりといえども其設備完からさるもの尚ほ少しとせず　就中美術及学理を応用すへき工芸技術を練習せしむる学校の設なきは最も欠点なりとす　故に本院は国費を以って此種の学校を工芸の盛んなる地に設立するの急務なるを認め政府に於て速やかに其計画を為さん事を望む

前記の建議書を受けて，京都高等工芸学校（現京都工芸繊維大学）が設立されることになる。

「美術工芸の学理とその応用の技術才能を授け因襲的傾向を持つ美術工芸界に刷新の気を興える人材を養成する」と言うのがその創立主旨であり初代校長　中沢岩太は「芸術家でなく，あくまで技術者であれ」と叫び，高級な美術工芸品でなく，

普通の生活用品を生産する，工芸産業のための要員教育を行ったのである。

1903年　明治36年

専門学校令が公布された。その校則の第1条には，高等の学術技芸を教授する学校は専門学校とす，とある。

5）　工芸の芸術化

1907年　明治40年

文部省美術展覧会が発足し，アカデミズムの傾向を強くして行く。そのため，工芸を一段低い芸術と考え，最初工芸部門を除外し，日本画，西洋画，彫塑の3部のみであった。

1912年　大正1年

農商務大臣，牧野伸顕　「当今わが国工芸品の輸出貿易がとかく不振の状態にある由縁のものは主として意匠の悪しきに起因せり。いまこれが改善を図らんとするに如何なる方策をとりて可然や」と手島精一ら4名に諮問し，それに答えて「工芸振興に関する建議書」が提出された。

1913年　大正2年

農商務省付属商品陳列所において，第一回図案及び応用作品展覧会が開催され。その目的は，輸出工芸品の品質及び意匠の改善であった。
当時唯一の官制の工芸展として新進工芸家がこぞって参加し，活況を呈した。しかし，その結果，審査方針は美術工芸重点に傾き，展覧会の性格も，産業や輸出とは無縁な一品製作のコンクールになった。審査員の大半が，美術工芸作家の長老で占められたからである。

1914年　大正3年

政府は東京高等工業学校工業図案科の廃止を決定。学校運営経費を理由に，3年後廃止して，東京美術学校図案科と合併した。

工業図案科長　松岡　寿は「もし又学科の統一と云う点より，工高と美校と，東京に二つの図案科を設け置くは無益なりとの理によりて，廃止合併が行われたのであれば，之あたかも正宗も葡萄酒も等しく酒なれば，同一容器に入れるべしと云うのに類して，能く両者の性質を究めず，唯皮相の観察によりて，同一物なりと速断せるにあらずやと疑わざるを得ない。」と述べて，産業としての図案と，美術としての図案を明確に区別して，工業図案科の廃止に反対した。

1918年　大正7年，

農商務省付属商品陳列所における，図案及び応用作品展覧会は，名称を変え，農商務省美術工芸展覧会となる。

1919年　大正8年，

楠部弥弌を中心とした陶芸集団「赤土」が結成される。

その規約の一節に　「忘我の眠りより覚めず，因襲的なる様式に拘泥せる陶工を謳歌し賛美するは，吾吾の生涯として余りに悲惨なり。自然の美の深奥を各自の愛を以って探究し，永遠に滅びざる美を陶器なる芸術に依って表現せるとす」

とあり，産業として商品を量産する職人としてではなく，個性を表現する，自立した作家であろうとしている。絵画や彫刻と肩を並べる，純粋な美術としての陶芸を目指す工芸作家の登場である。

6）　工芸の二つの流れ

1921年　大正10年

松岡久　安田禄造らは美術学校の図案教育は産業工芸教育とその目的を異にすると主張し「本邦工芸立国の現在及び将来」を時事新報に連載。財界，政界，業界に働きかけ，文部省の認めるところとなる。その結果，大正10年東京高等工芸学校が創設された。

1922年　大正11年

東京高等工芸学校（現在の千葉大学工学部）が開校される。

（学校規則　第一章一条）　本校は実業学校令に依り工芸に従事せんとする者に高等の学術技芸を授くる所とする。

この年　権田保之助は「美術工芸論」を表し美術工芸運動の三傾向を指摘する。

1. 復古的工芸。工場制工業，機械生産，大量生産を排斥し，手工業へ復帰しようとする。
2. 社会政策的工芸。生産手段としての工業を認め，趣味の民衆化，大量生産をして，廉価にする。
3. 創造的工芸。我々はかかるぬえの様な趣味を以って民衆に擬することはこれ決して民衆を趣味化し生活を芸術化する道ではない。

1923年　大正12年

東京高等工芸学校第一回入学式が行われ，校長松岡　寿は次のような訓辞を行う。

工業と云へば機械工業や，電気工業や化学工業の如きものに限るものの如く思って競って此の事業に赴く有様であって，此等の工業を応用して優良善美なる精製品を産出する処の工芸技術の発達を顧みることがなかった事は，一大欠陥であったと云はねばんらぬ。

1925年　大正14年

商工省が農商務省から独立。農展は「商工省工芸展」となる。

1926年　大正15年

工芸時代が創刊され，その巻頭言で高村豊周は，純粋工芸の存在と意義を主張する。それは農展の流れをくみ，商工省のもとにある商工省工芸展が，産業としての工芸の方向にあることにあきたらない人達，例えば美術学校を出て，芸術家であろうとする人達の依りどころとして，帝展に工芸部を作ろうとする動きを代弁するものであった。

純粋工芸，即ち工芸美術は絵や彫刻と同じ意味での鑑賞を旨とするものである。形骸は実用品に借りる。しかし実用第一ではない。量，線，面，色，そういったものについての，作家の感覚の深さ，鋭さを見なければならぬ。同じ絵が二枚と描けぬように，同じ花瓶は二つ出来ぬ。絵や彫刻がそれ自身価格を持たぬと同じ用に，工芸美術もそれ自身価格を持たぬ。作品は美術館に保存されるか小数の個人の手に保有されるか，作家自身が蔵ておくかの三つで一般民衆のそれぞれの手には渡らぬ。

産業工芸は，純粋工芸と形骸は同じであるが実用第一である。鑑賞が主ではない。鑑賞が実用と平行までは行く。しかし実用を飛び越す事はない。

（中略）

これは科学的または機械的作業に依って同型の物が無数に出来る。産業工芸は純粋工芸と違って，算盤をはじけば，その製品１個に付いての価格が明瞭に出る。その製品は一般民衆のそれぞれの手に渡る。

前者は美術の領域，後者は産業の領域である。国家がこれを奨励するなら，現代に日本の行政機関に於いては，前者は帝国美術院，後者は商工省であらねばならぬ。

この年に，帝国工芸会（会長板谷芳郎男爵）が

設立される。ドイツ工作連盟が果たした役割が注目され，その影響のもとに，類似の組織として設立されたものである。産業と芸術を結び付け，工業的に量産される日用品の質の向上のために，それに関わる諸分野の人達を糾合しようとするものであった。

高村豊周らは，帝展に工芸部を設けるために，工芸が純粋芸術であると言う理論付けを行い，産業としての工芸に決別する。その結果として，昭和2年帝展第4部として工芸部門が出来る。

一方で帝国工芸会は工業，産業としての工芸を目指すが，現実の産業界の理解を得られなかったと言われる。しかし，昭和3年，仙台に工芸指導所が出来，商工省の中では，産業工芸と言う考えで諸策が進められることになる。少しづつ姿を現していた，工芸と言う言葉に与えられる二つの意味，芸術としての工芸と，産業としての工芸が，明確な形で分離されて行くことになる。この様にして時代は昭和へ入って行く。

（本稿中のアンダーラインは筆者による）

参考文献

矢島祐利　野村兼太郎編　「明治文化史」5巻　学術　原書房　昭和54年

上野直昭編　「明治文化史」8巻　美術　原書房　昭和56年

青木　茂　酒井忠康編　日本近代思想大系　「美術」　岩波書店　1989年

飯田賢一校注　日本近代思想大系　「科学と技術」　岩波書店　1989年

東京美術学校編　「東京芸術大学百年史」第一巻　東京芸術大学百年史刊行委員会　昭和62年

千葉大学工学同窓会編　「千葉大学工学部60年史」　教育文化出版　昭和57年

出原栄一著　「日本のデザイン運動」　ぺりかん社　1989年

高村豊周著　「自画像」　中央公論美術出版　昭和43